

令和4年度 北海道教育大学札幌校

教員養成課程

私費外国人入試

小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子を開かないこと。
- 2 この問題冊子は3ページ、解答用紙は2枚、下書き用紙は2枚あります。
- 3 「問1」「問2」すべてに解答すること。
- 4 解答用紙は、「問1」「問2」それぞれ1枚あります。
- 5 解答は解答用紙に横書きとし、句読点及び段落の空白も1文字とし、指定された字数内でまとめること。ただし、題・氏名は記入しないこと。
- 6 受験番号は、解答用紙の指定欄に記入すること。
- 7 解答用紙2枚を提出し、問題冊子・下書き用紙は、試験終了後持ち帰ること。なお、いかなる理由があっても解答用紙以外は受理しません。
- 8 試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により交換を必要とする場合は、手を挙げて監督者に知らせること。

問題 次の文章を読んで、問1と問2に答えなさい。

本書は、タイトルどおり「科学的とはどういう意味か」について書こうとしたものである。ところが、さてそろそろ執筆しよう、と思ったちょうどその頃に、東北で巨大な地震が発生した。津波と原発による被害が特に大きかった。僕は現役を既に退いていたけれど、それでもかつての仕事仲間から大量の情報がもたらされ、また多くの助言を求められた。実際に、計算をしてほしいという依頼もあった。詳しいことを書くつもりはないけれど、2週間ほどはそれらの対応に時間を取られ、原稿を書き始めることはできなかった。

連日 TV やネットでは報道されている情報にもなるべく目を通し、また、必要なものは過去に遡って世界中の情報を収集した。

少し落ち着いてから考えたのは、悲観的なものから楽観的なものまで幅はあるにしても、特に国内における情報の多くが、「涙と人情」に流された感動ドラマを作ることに終始し、「まずは涙を流そう、でも最後は元気を取り戻してみんなで笑おう」というような感情に流された演出が目立っていたことだ。そういったものが無駄であるとは言わない。人間にとって「気持ち」の影響力は大きい。けれど、いくら感動しても、いくら泣いても、飢えている人を救うことはできない。いくら一時の笑顔があっても、それは「解決」ではない。まして、「人道支援」と「防災」は別問題である。

よく「自然の猛威の前に人間は無力だ」という言葉で片づけてしまうことがある。これは、「油断をするな」という教訓としては正しい。しかし、自然の猛威から人間の命を救うことは、可能である。それができるのが「科学」であり「技術」なのだ。極端な言い方になるけれど、科学的な知識を持っていることが、身を守る力になる。「気持ち」だけでは人は救えない。きちんとデータを分析し、そこから予測し、次の手を打つことが人類の力なのだ。

当然ながら、科学知識のない人が被害者になった、という意味ではない。科学を盲信した、と安易に片づけることもできない。

それでも、「津波が来ても、防波堤があるから大丈夫」という言葉を信じた人は多かったのではないか。そこには、「津波」とは何なのか、どういったメカニズムで安全を確保しているのか、何メートルの津波まで想定されているのか、という「科学」が忘れられている。「難しいことはいいから、結論だけ言って」という姿勢が、「言葉」だけですべてを処理してしまう傾向を助長する。そこに危険性がある。そういうことを、この災害で再認識した。

今の若い人は、ある程度完備した科学社会に生まれている。携帯電話もカーナビも当たり前になった社会である。発展の過程を見ていない彼らは、どういった原理でそれらが機能しているのかを知らない。知らなくても、その恩恵を受ける

ことができる。充電さえしていれば、誰とでもいつでも連絡がつくと信じている。電波がどんなもので、どのような設備によって成り立っているのかを知らない人が多い。十数メートルしか離れていない場所なのに、携帯電話が通じなくなることがあるなんて、考えてもいないだろう。

こういった「科学離れ」については、昔から問題意識はあった。だから、子供たち向けに科学を教育するシステムをいろいろな形で模索してきた。けれども、僕が感じるものが一つある。そういう教育をしているのは、科学が好きな人たちだ。だから、口を揃えてこう言う、「科学の楽しさを子供たちに知ってもらいたい」と。この言葉を聞くたびに、「楽しさ」を押しつけている姿勢を感じずにはいられない。

読書の楽しみを知ってもらいたい。スポーツの楽しさを感じてもらいたい。ほかの分野でも、こういった姿勢は根強い。しかし、科学の場合は、そんな悠長な問題ではない、と思うのだ。読書やスポーツが嫌いな人は、それをしなくても良いだろう。楽しみは、ほかにいくらでもある。しかし、科学を避けることは、この現代に生きていくうえではほとんど無理なのである。「僕は日本語が嫌いだから、日本語は聞きたくない」と言うのと同じレベルだといっても良い。もはや、好きとか嫌いで片づけられるものではない、ということだ。

だから、この本に書いた意見は、「これで科学を好きになってほしい」「少しでも興味を持ってもらえれば嬉しい」ということではない。①「科学から目を背けることは、貴方自身にとって不利益ですよ」そして②「そういう人が多いことが、社会にとっても危険だ」ということである。

出典：森博嗣『科学的とはどういう意味か』幻冬舎新書 pp. 11-15、2011

問1 著者は、①「科学から目を背けることは、貴方自身にとって不利益ですよ」と述べています。なぜ筆者はそう考えるのか、文中の事例を取り上げて400字以上500字以内で説明しなさい。(100点)

問2 著者は、②「そういう人が多いことが、社会にとっても危険だ」と述べています。この意見に対するあなたの考えを500字以上600字以内で述べなさい。(200点)